

## スマート農業技術に関する視察研修への対応

当センターでは、農作業の担い手不足や高齢化への対応を目的に、令和元年度から2年度にかけて国の事業※を活用し、中山間地域の水稲栽培においてスマート農業技術・機械を組み合わせた一貫体系の実証調査に取り組みました。

3月17日、この実証成果の地域での活用を目的に府内生産者団体が視察研修として来所されました。当センターからは、自動運転トラクタやドローン防除など、作業の省力化に寄与するスマート農業技術について説明しました。

また、実証農家からはスマート農機の使用感や導入後の取組状況が紹介され、センター内ほ場ではドローン飛行の実演も行われました。

今後も、スマート農業技術の現場への定着を図るため、研究成果の整理と情報発信、研修・視察対応を通じた普及活動に取り組んでいきます。

※スマート農業技術の開発・実証プロジェクト



スマート農業技術を動画で紹介



センター内ほ場でドローン飛行の実演

## ニホンジカによる森林・林業被害分布図を作成

ニホンジカ(以下「シカ」)は、京都府のほぼ全域に生息し、近年、個体数が多い状況にあり、農林業に大きな被害を与えるとともに、森林の下層植生等の採食により森林生態系にも大きな影響を及ぼしています。

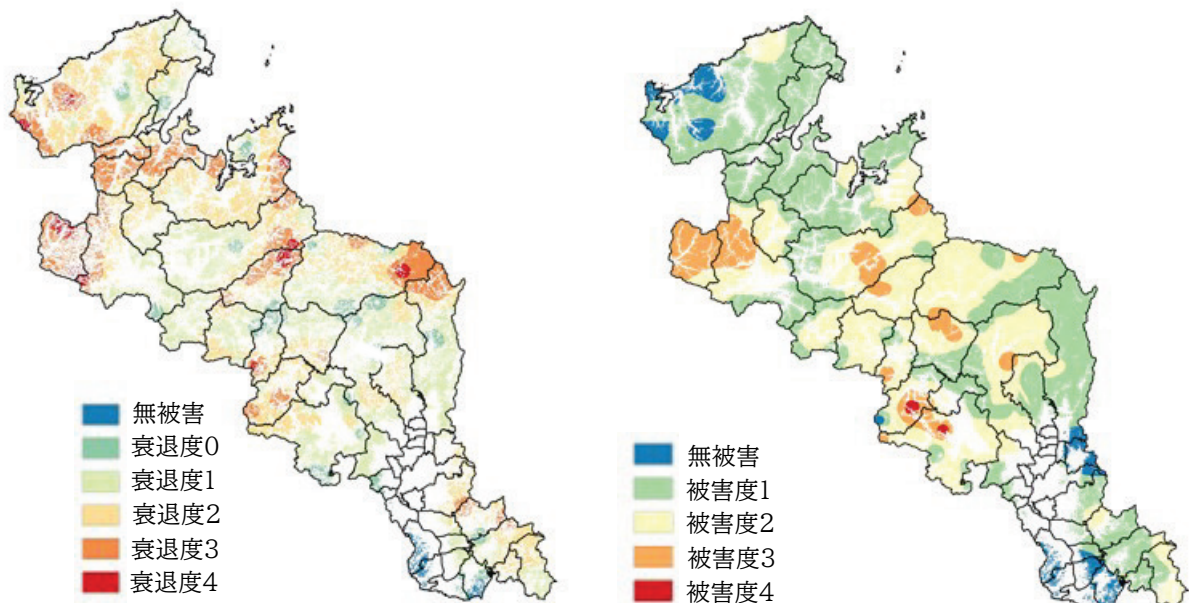
そこで、森林・林業被害を広域的に把握するため、令和6年度に農林センター環境部、森林技術センター及び農村振興課が府内約360地点で下層植生衰退度調査<sup>※1</sup>と人工林の剥皮調査<sup>※2</sup>を実施し、調査結果を解析し、被害分布図を作成しました。

本調査は平成23年度から3回実施しており、過去の被害分布と比較することで、被害の進行や回復の状況を把握するとともに、個体数管理や被害防除に役立てることが出来ます。

当センターでは、引き続き、シカの密度と被害との関係や、過去の被害状況からの変化などについて解析を進め、増えすぎたシカの個体数管理や被害防除などの府計画(第二種特定鳥獣管理計画-ニホンジカ-第7期(令和9年~))策定に向けた情報提供をしていきます。

※1下層植生衰退度調査:シカによる下層植生の採食や樹木の剥皮による森林生態系への被害を調査

※2人工林の剥皮調査:人工林の樹木の樹皮剥ぎなどの林業被害を調査(剥皮により、樹木の枯死や、木材の腐朽や変形などの被害が生じます)



下層植生の衰退状況

人工林剥皮被害の分布(ヒノキ)

## 水稻の高温対策について講演しました

綾部市興農会議主催のフォーラム「第24回明日の農には夢がある」が3月1日にあやテラス・ホールで開催され、当所の研究員が水稻の高温対策をテーマに講演しました。

講演では、近年問題となっている不稔、未熟粒、胴割粒などの高温障害の発生要因について説明しました。その上で、当所におけるこれまでの試験研究結果を紹介し、高温条件下でも品質低下を抑えるための栽培管理上の留意点や対策の方向性について解説しました。

フォーラム終了後のアンケートでは「参考になった、地域に周知したい」「高温対策、高温耐性品種について試験をしてほしい」といった意見が寄せられました。

当所では、今後も府内の農業関係団体と連携し、研究成果の情報発信に努めていきます。



講演する研究員

農林センター(丹後農業研究所)

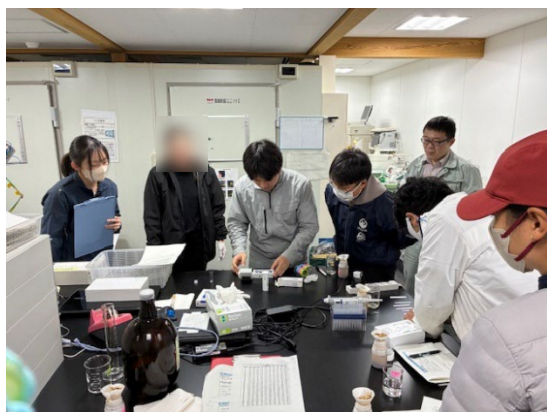
## RQ フレックスを用いた土壤窒素簡易分析実習

当所では、茶業技術研修生や宇治茶実践型学舎生を対象に、座学と実習を組み合わせた講義を行い、実践的な理解の促進に取り組んでいます。これらの講義・実習は、年間を通じて約100時間実施しています。

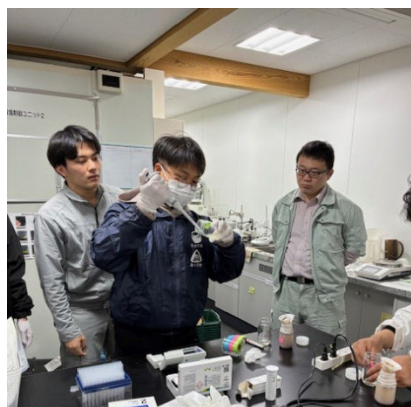
3月の「土壤肥料」に関する講義では、茶の適切な栽培管理に必要な土壤中窒素の把握を目的に、簡易分析の実習を行いました。講義の中では、茶が生育の過程で利用しやすい窒素の形態があることを踏まえ、土壤中の窒素の状態（アンモニア態・硝酸態）を把握する重要性について説明しました。

実習では、RQ フレックス※を用いて、土壤中の窒素含有量を簡易に測定しました。当日は、市町村推薦による茶農家の後継者や農業職専攻研修・茶チームの研修生を含む6名が参加し、当所職員の指導のもと分析手順を体験しました。参加者は、土壤分析が施肥設計や日常の栽培管理に役立つことを理解する機会となりました。

※RQ フレックス:試験紙を用いて土壤成分を簡単に測定できる携帯型分析装置



講師の説明を真剣に聞く受講生



分析試料の試薬を注入する受講生

## 成績報告会を開催しました

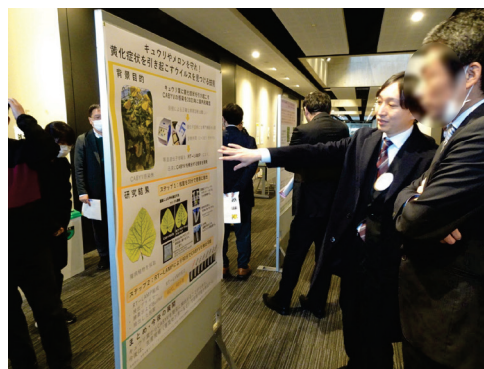
当センターの令和7年度成績報告会を3月17日に京都府立大学稲盛記念会館で開催し、農家、農業関係者及び一般府民から52名の参加がありました。報告会では、米のタンパク質に関する研究活動についての特別講演に続いて、高温に強い酒米品種の開発、緑肥すき込みによる虫・病・雑草害の抑制効果について研究員が報告しました。その後、金時ニンジン、黒大豆エダマメ及びアズキの育種と、キュウリのウイルス病に関する6課題についてポスターセッションを行いました。

参加者からは、「酒米の消化性の評価方法について」の質問や、「緑肥が三刀流の技術となることを期待する」などの意見が寄せられました。

当センターでは、今後も生産現場での活用につながる研究を行うとともに、研究成果を多くの方に知っていただくよう努めます。



研究報告の様子



ポスターセッションの様子

## 京地どり研究会で試験研究を紹介

3月3日にリーガロイヤルホテル京都において、京地どり生産・流通推進協議会と共催で、第4回「京地どり研究会」を開催し、会員ら約40名が参加しました。

今回は、「京地どりのブランド力強化に向けた商品化率向上のための低コスト生産技術の確立」をテーマに、当センターで取り組む「京地どりメスの腹腔内脂肪低減」および「酒粕の飼料利用」に関する試験研究を紹介しました。

意見交換では「腹腔内脂肪低減にはリジンの含量が重要」「酒粕のアミノ酸組成はどの程度か」「知り合いの酒蔵から出る酒粕の飼料利用に興味がある」といった意見が寄せられ、当センターの試験研究への関心の高さがうかがえました。

研究会後の交流会では、京地どりをういたフレンチコースを味わいながら、参加者と京地どりの生産・流通やブランド力向上に関する意見交換を行いました。

当センターでは、今後も現場から寄せられる意見を踏まえ、引き続き京地どりの生産・流通振興に資する試験研究を推進していきます。



当センターの試験研究について紹介



京地どりをういたフレンチコース

## 畜産人材育成研修生が研修を終え、新たな担い手へ

当センターでは、府内で畜産業に携わる人材を育成するため、令和2年度から畜産人材育成研修を行っており、3月11日に、酪農を志望する第5期生1名が2年間の研修を終え巣立ちました。

研修生は、1年目に基礎的知識を身につけ、2年目には家畜人工授精師や受精卵移植師の資格を取得し、また当センター以外にも数々の酪農インターンシップを経験するなど、着実に実践力を身に付けていきました。

4月からは新たな牧場で就業が決まっており、研修生が立派な酪農の担い手として活躍されることを期待しつつ、今後もさらなる畜産人材の確保に努めていきます。



研修生を囲んで記念撮影

## 令和7年度 海洋センター研究報告会の開催

3月3日に京都府水産会館において、「令和7年度京都府水産事務所普及指導員の活動実績報告会及び海洋センター研究報告会」を開催しました。同報告会には、府内漁業者、漁協及び沿岸市町関係者が参加し、当センターからは、海藻・二枚貝・定置網・底曳網に係る計4題の研究課題を報告しました。漁業者からは、「経験と研究で得られた科学的根拠をミックスした漁業を行っていきたい」、「研究員には、これまでと同様に積極的に浜へ出て、漁業者とコミュニケーションを取ってほしい」等の意見が聞かれました。

今後も引き続き、現地の要望に沿った研究を進めていきます。



報告会の様子

## ～京都府農林水産物で新しいおいしさを～

### マッチング & 交流会を開催

当センターでは、令和9年開設予定の「京都プレミアム中食オープンイノベーションラボ(以下、ラボ)」で予定している商品開発支援に向けた取組の一環として、「京都府産の農林水産物を使って新たな商品を開発したい」と考える加工事業者と、「こだわりの農林水産物を新しい形で活用してほしい」と考える生産者とのマッチングを目的としたイベントを、3月3日に宇治市にて開催しました。

当日は、加工事業者等が商品開発に関し、過去事例や今後の構想について話題提供した後、参加者同士が自由に交流しました。

当センターは、今後もラボ開設に向け、周知活動など様々な取組を続けていきます。



参加者によるプレゼンテーションの様子